

初めての水彩画グループ展を終えて

京都支部 小林志津子

4月の終わり、30日より6日間、ゴールデンウィークに大人の絵塾展“ぎつくばらん”をギヤラリー雛にて開催しました。
この時期にしては少々肌寒い気候でしたが、夙川の川面に沢山の鯉のぼりが泳ぐ5月、天気にも恵まれ、心豊かな経験をさせてもらったと嬉しく感じています。

なにしろ、画廊で自分達の作品を披露し、見て頂くなど、生まれて初めての経験なので準備段階から、案内状は出したものの、皆さん来て下さるだろうか？ どんな風に見られるだろうか、と不安でいっぱいでした。

初日の30日、午前十一時開廊と同時に一人の男の方が入って来られ、真剣な表情で絵を見ておられました。その方は、「娘の作品もこうして飾ってあるとよく見える」と大変喜ばれていました。その方が帰られると、一人また一人と途切れる事無く、いろいろな方が見に入つて来られ、嬉しく応対したものです。

作品の中には皿にのった食パンや、履き慣れたシューズなど身近なテーマのものもありこんな物も作品として成立するのかと面白がつておられる方も多くありました。事実テーマは殆どが室内で描いたものばかりで、生活感が滲み出ている作品もあり、質的に高くはありませんが、楽しい雰囲気の中で描いた作品群です。

会期中は沢山の方に見に来て頂きましたはるばる遠方より車をとばして来てくれた友人、バイクを終えバイクで閉廊間際に来てくれた私の教え子、この時が初めての一回限りの絵を見て感想を言つて下さった人たち、そして何より新日美の方々が来て下さり、適切な助言もいただき、明日への希望につながりました。

私はこの時ほど新日美のメンバーである事を嬉しく思った事はありません。また最初から最後までいろいろな面でお世話になったギヤラリー雛の鎌谷さんには心からお礼申し上げます。あつと言う間の6日間でしたが、

私の心の中に大きな財産をいただいた日々でした。

支部展報告

千葉支部展 支部長 小宮山修

今年の千葉支部展は例年よりやや早く4月9日～14日の6日間、我孫子けやきプラザギヤラリーにて開催した。

新しい支部員四名、一般参加一名と会長に特別出品を戴き、絵画30点、陶芸4点(出品者十八名)を展示、半日雨の日もあつたものの、総じて天候に恵まれ多くの来訪者に鑑賞していただき成功裡に終了することが出来た。



会長が支部展に来られると作品の画評もあり盛り上がりがあります。が、なかつたため初の試みとして、本展外部審査員の芳賀文治先生をお招きした。

当日の会場には今回の支部展に出品は出来なかつた会員もあり複数集まり親交を図ることができた。芳賀先生画評には熱心にメモをとったり状況の説明や質問をしたりで熱心に耳を傾け大変有意義であつた。

一般参加の新人も本展出品への夢が広がつたようで支部としても、会員増加に努めていきたい。又、会員一人一人のレベルアップが支部展には必要と意をあらたにし会期を終えることができた。

東京支部展

支部長 大石 亨

第32回新日美東京支部展が文京シビックセンター・アートアカデミーで、5月5日～5月10日、開催されました。

文京シビックセンター(文京区役所)は交通の便が大変よく、かつギヤラリーとしても設備が十分整つており、これが観客にも受けて例年入りも上々、私どもとしても大いに満足しているところです。

本年は参加人員絵画19名、作品47点、工芸4名、作品9点でした。ギヤラリーはその広さからしてもびつたりの状況でした。観客もグループ展としては上々の入りで連日100名を超え、6日間で767名のお客さまを迎えました。

これ、ひとえに支部会員の努力によるものと自画自賛するところです。事実、会員はそれぞれに個性に富んだ力作を寄せられました。中でも北海道江別市にお住まいの有田裕子さんは今年もはるばるお寄せ下さいました。

又今年には2人の新人、二瓶博厚さん、三木トク子さんが独自のユニークな日本画をお寄せ下さいました。いずれも新人らしからざる腕前の程を見せ、評判も上々、本展への出展を期待しています。

お客様から色々批評を頂きました。「それぞれに画風の違った絵が見られて面白い」「昨年は区役所へ来たついでに立寄つて見たが、今年には絵を見たくてわざわざやつて来ました」「ETC・9日には芳賀先生をお迎えして作品ごとに色々批評を頂きました。」

又初日の夕方から近くのレストラン「北海道」で各支部有志の参加を得て年一度の懇親会を開催しました。席上、岡田三郎さん(埼玉)の尺八とハーモニカの演奏があつて大いに盛り上がりました。有難うございました。これからは秋の本展に備えて皆さん頑張りましょう。

そして来年は更に多くの新人を迎えて元気いっばいの支部展としましょう。

埼玉西支部展 (第36回)

支部長 千木良宣行

「鈴の中の玉」 支部長千木良宣行
「鈴でも玉が入りや鳴るけつど、入つたらんと鳴らんけんう」(稲葉の源左)。「何事も本気にならなければ、本人の心に火が付かなければ始まらない」(青山俊董)。鈴は自分であり、支部員一人ひとりであり、玉は絵への、あるいは美への熱い思い(情熱)だ。その「思い」が支部展に現れ、「美」を愛する新日美や、地域の人々から評価される。その場のぎの、付け焼刃ではダメだ。



二日目、数人のお付き人と会場に入つてきた紳士がいた。美術館の学芸員もいる。熱心に観ているので挨拶をしたら、「この会はどういう会か？」と訊かれた。新日美について説明し、こ

れは埼玉西支部ですと答えた。すると「川越はレベルが高いんだね」と言われ名刺を頂いた。「松平直泰」とあり右上に、何と三ツ葉葵の紋所が刷つてある。仰天して学芸員に聞いたら、前橋のお城の城主の子孫で、前橋に美術館を造るので川越に調査に来たとのことで、「新日美でよかった」と小声で言つた。又、芳賀先生にお願いしたギヤラリーは大好評で、他の会の人達や先生方まで参加し、メモを取りながら熱心に聴講していた。この外にも「いい展覧会だ」とか「レベルが高い」など多くの評価を耳にした。どうやら鈴に、玉は入つていたようだ。「玉が入っていない鈴は、鳴らない」、そして玉(心・魂)の入った鈴ほど、音(評価)は鳴り響き、心ある人達が寄つてくる。